

発行/平成2年10月15日 No.19
えひめ地域づくり研究会議
(財)愛媛県まちづくり総合センター

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 19

特 地域と二人三脚 “青年団” 集

- 凄い男がいたもんだ!
美川村 坂口大作……………2
- 地域への訴え～青年団自主制作ビデオより～
広見町 兵頭誠亀……………4
- 河辺村振興青年会議 今、必要なもの
河辺村 石浦睦仁……………6
- ああ！我が青春、地域とともに
丹原町 青野敬治……………8
- 情熱……そして感動
今、九島青年団と共に!!
宇和島市 都築孫弘……………10

研修レポ

- 第4回全国いきいきむらづくり……………12
青年大会(富山県利賀村)
- 第6回水郷水都全国会議……………14
(栃木県小山市)
- ☆まちセン 今昔物語…part I
山本 均……………16

REPORT

- 元気印レポート
阿弥陀会/三崎町……………18
- ☆お便りコーナー 亀岡 徹……………19

研究会議 News Letter

- 大切なのは、これから
—いわぎ村づくりシャベリング—……………20
- 地域づくり学んで3年
よもやま話ノート……………22

MESSAGE

- どっこいみんなの奉納芝居……………24
/川之江市 吉岡達也
- TOWNタウンパソコン通信……………26
- ☆国民文化祭……………27
- ☆お知らせ……………28



その朝、彼はテレビのCMのな
んとも賑やかな音で目を覚ました。
昨夜も遅くまで青年団の役員会に
出席し、その後もかなり話しこん
でいたのである。家に帰って床に
入ったのは夜中の一時を少しすぎ
ていた。まだはつきりしていない意
識の中で彼が一言つぶやく：

「うるさいテレビやね…」

そして、タバコに手をのばす。

(やっぱりテレビはNHKに限る
ね。民放はCMがあつてどうも

好きになれないし、その点NH
Kはいいね。放送してる番組も
勉強になるものばかりだし：)

そして、タバコに火をつけて

ゆっくりと吸い込んだ。まくらも
との畳にはタバコの焦げ跡が四つ
ある。朝起きて半分ねぼけた状態
でタバコを吸う。そして手にもつ
たまま知らないうちに又寝てしま
う。そうするとタバコが落ちて畳
を焼くのである。それならまだい
いが時々彼は自分の指をヤケドす
る事もあるらしい。全く困ったも
んである。そんな彼はまだ独身で
ある。ここで彼について少し紹介

しよう。

名前は坂口大作。年は二十五才。
男であるが身長は五尺九寸に少し
足りない。体重は二十貫。昭和四
十年三月三日上浮穴郡美川村に坂
口家の次男として生まれ云々：。
今、そんな彼が仕事以上に熱中
しているものが一つある。それは
青年団である。今年の春から消防
団も入っているがそんなものには
出たことがない。それよりも彼に

凄じ男がいたもんだ!!

美川村青年団 坂 口 大 作

由はたくさんありますよ。

一、将来の人生のパートナーとな
るべき嫁さんも見つけたい。
一、自分の生まれ育った美川村を
楽しくしたい。
一、友人がたくさん出来れば素晴
らしいと思う。その友人は私
にとって目に見えない。しか
もお金では買えない大切な財
産だと思う。そんな友人がた
くさんいたら人生楽しくして仕

とつては青年団活動が楽しくして仕
方がない様である。では何故、青
年団がそんなに楽しいのであろう。
彼に聞いて見ると、こう答えてく
れた。「今の私には将来の夢が、
はつきりとしたものがないので、
それを見つけたいから青年団をやっ
ている。」

理由はそれだけですかと聞くと
こう答えてくれた。
「青年団を一生懸命やっている理

方がないんじゃないですかね。
一、自分を磨くんだったら仕事す
るより青年団活動をするべき
だと最近になって思い始めた
から：」

彼は一言一言をかみしめる様に、
そして、自分の七年間の青年団活
動をふり返る様に語ってくれた。
そして、しばらくして彼は私にこ
んな事を話してくれた。
『私自身、七年間の青年団活動

を通して思ったことに、最初から
村おこしとか町づくりのために青
年団をやつて来たわけじゃないん
だということがあります。さきは
ど言った様な理由は最近になって
私の心に感じだしたものでなんです
よ。じゃあ何が私自身を変えてし
まったのかというと：。

自分自身の人生を楽しくしたい
という遊び・心中心の人間の欲求と、
私のまわりの友人の影響だった様
に思います。始めはただの団員
だった私が、今では上浮穴連合
青年団の団長です。美川村青年
団でも私はけっこう元氣人間で
通っていると思うんですけど、

美川村の団長だけで終わるのは青
年団を極めたとは思えないので、
それで上浮穴連合まで少し背のび
をしてみたんですが、自分でも良
かったと思つてます。上浮穴郡内
の元氣な青年と友人になれたし、
愛青連の中でも何人かの元氣な人
と知り合えたことは私にとって大
きな収穫だったと思ひます。それ
もこれも、私の友人に阪本雅彦君
と林克也君という青年団馬鹿が二

人もいたからだと思います。』



彼自身が語ってくれた言葉の一つ一つに随分と自信あふれるものが伝わって来たんですが、それは最後に、一問一答で次の質問に答えていただきます。

Q..あなたにとって青年団はすべてですか？

A..いいえ。私にとって青年団活動は人生の通過点にすぎません。でも、今をひた向きに出来ないと後で後悔しそうな気がします。

Q..青年団は三十才までですが三十すぎたら何をしますか？

A..青年団よりも楽しいサークルに入りますよ。そんなものが見当たらなければ自分たちで作ればいいと思っています。

Q..村おこしとは何ですか？

A..それは人づくりに始まると思うんですが、青年団活動はその人づくりそのものでもあるとは思いませんか？今すぐに色や形やイベントとなって現われるものと思うのではないのとありますけどね。今、私たちは美川村という畑に名もない種をまいているのと同じですよ。名もない種ですから、どんな大きさのどんな色の花が咲き、そして実がなるのかもわかりません。種まきをしている私たち自身も昔の先輩たちがまいた種だったのでしょ。うね。私はその種を後継者と呼んでますけどね。でも、かならずその種が芽を出すとは限らないですよ。

Q..それでは、これからの青年団

とはどういうものであればいいと思いますか？

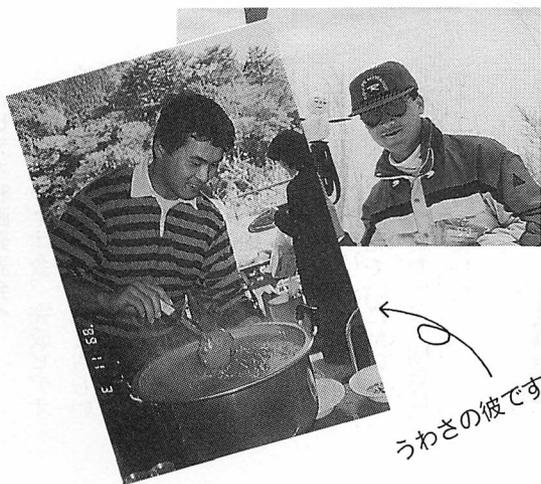
A..とにかく楽しくなければいけないと思います。それと目的意識をかならずもって行動すべきですね。一つのイベントに対して目的をもってどれだけ楽しくそしてひた向きになれるかです。失敗してもいいから、思い切り自分を背のびさせて行動すべきですね。イベントが終った後に疲労感を感じない様ではだめですし、失敗は次の成功への糧となるんだから、何もしないよりは何かを行動しつづけるべきだと思います。そういった中で自分が楽しいと感じた時から始めて、村のためとか人のために動ける様になると思います。青年団は強制という形では発展しませんよ。すべては自立・自発・自覚といった前向きな気持ちになって始めて人を動かすことができると思います。人を動かすことが出来るという事は一つの時代を

つくり、村を動かすということではないですかね。

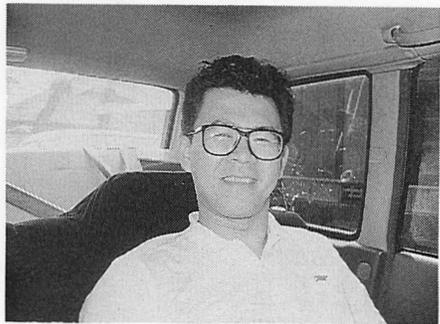
Q..どうもありがとうございます。

A..どういたしまして。

「舞たうん」を毎号読んでいるみなさん、美川村にもこんなへんな奴がいたんですよ。どこかで会ったら気軽に話しかけて下さいね。因に彼（坂口大作）とはこの文を書いた私のことです。はい。



うわさの彼です!!



兵頭 誠亀さん

☆青年団解散？

昭和六十三年当時、我が町の青年団は、解散しようとしていた。私も賛成だった。

マンネリ化した行事、団員意識のない団活動、役員疲れ。存続へのよい材料は見あたらない。団員は二十一名。役員は、毎晩遅くまで話し合った。存続か、解散か。若い団員には、地域とか、青年団への愛着は薄い。さらに、若者同士のつながりにおいてもしかりである。

しかし、先輩が『数十年伝統を守ってきた青年団を、投げやりな気持ちで解散するの...』古株の

役員はこう言う。

☆ビデオ映画づくり

語り合った末に、「解散する前に何かやってみよう。一年間、団員として意識の持てる活動を。」

ここからビデオ映画づくりが始まった。その年、私は団長を引きうけた。不安の多いスタートだった。

題材は、若者の悩みの一つを取り上げた。田舎の結婚問題である。

地域への訴え

〜青年団自主制作ビデオより〜

広見町 兵 頭 誠 亀

愛し合っている長男・長女が、家の父母、周りの人、友人などあらゆる環境に取り巻かれながら悩み、田舎だから妥協せざるを得なかった長女の心の変化を表現した。

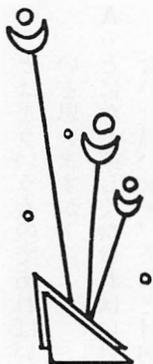
初心者ばかりのスタートで失敗、失敗の連続であった。不慣れなビデオ操作から撮影時間が長びいたり、屋外ロケで天候に悩まされたり、ロケ地の交渉、スタッフ、キャ

ストの日程調整など、問題は多かった。

しかし、収穫も多かった。団員が少しずつ増えてきたのだ。青年団への勧誘ではなく、映画出演の勧誘をしたのだ。又、ロケが進むにつれて、始め嫌がっていたキャストの団員が次第に演技に没頭し、監督に注文をつけるようになってきた。そして、ニュース・町広報などのPR活動で、地域の人たちへの反響が以外に大きく、予想以

上に協力していただいた。

半年が過ぎ、ビデオ映画制作も大詰めを迎えた。いつの間にか、団員数は、五十名を越えていた。映画シーンの細部について、討論が続いた。



☆ビデオ映画発表会へ

完成間近の全体会。完成ビデオ映画を地域の人たちに見てもらいたい。俺たちの悩みをわかってほしい。そんな気持ちから、ビデオ発表会を開催することとなった。若者が要求した地域社会へのアピールである。盛り上がってきた。町内五地区での発表会。千名を越える人たちに見ていただいた。やっと一年が終わった。団員は、七十二名になっていた。



☆名川町青年団との交流

次の年、解散の声は聞こえず、役員が決まっていた。団長は、映画制作の為にいったニューフェイスであった。

そんな時、全国青年団新聞に、去年の記事が掲載されたのがきっかけとなり、青森県の名川町青年団が視察研修したいということ、来町することになった。平成二年三月のことである。二泊三日、ホームステイをする中で、意見交換

をした。その中で、若い広見町の団員は、今まで一年間通して作ったビデオ映画作りが、意識をもった青年団活動として、それぞれ団員一人一人の心の中に位置づけられ、再認識する結果になっていった。このような意見からも、名川町青年団との交流は、特に意味深いものであった。

☆映画最大の目的

素晴らしい映画の完成よりも、



ビデオ映画制作の過程の中で、いかに団員一人ひとりが映画制作を充実した青年団活動として位置づけていくことができたか。これに他ならない。

又、田舎の若者がかかえている悩みの一つを青年団が取り上げ、更に地域の問題として、住民の方々と共に考えていこうという真に「生きた教材」としての意味あいが強くあった。

現在の青年団に代表されるように、若者と地域との関係は、比較的閑静な純農村地帯の広見町でも非常に薄くなってきた。しかし、今回の活動を通して、若者の悩みというものも、地域の問題として、住民の方々といっしょに語り合えたことは、団員にとっても、今後の社会生活において、大きな

自信とパワーとなって自らを後押し、手助けとなるに違いない。そして、我がふるさと広見町にいる若者一人ひとりが生きてゆく為のライフスタイルのワンポイントにしてくれればと願っている。

活動の初めから、地域との交わり、又地域の為に...などと考えてはいない。そんな余裕はない。若者が集まって何ができるか、スタートはそこであった。結果として残った一人ひとりの財産。それは、ビデオ映画ではなく、活力。その活力から地域社会への扉を開けるような気がする。

青年団OBとなった今、又新しい何かを自分たちで見つけ出してほしいと願っている。



青年団・・・河辺村では、こういう呼び方はしない。というより青年団は、なくなったのだ、何年も前に。青年団は農業後継者と合併し名前も『河辺村振興青年会議』と変わった。

特に農業後継者の数が減少しその活動も継続できなくなったのだ。農業の衰退を考えれば、こうなることは自然な事だったろう。

村の六十歳以上の人口が全体の二十四・五パーセントになろうかと言うのだから、その過疎化の程度が分かるだろう。

現在、村内の青年といえば名前をあげても知れている。おおかた



が長男か、後継ぎ娘と言ったところだ。実際の活動へは、おきまりのメンバーがよく集まって十数名、「何をやるにも人が集まらなければ話にならない」と声をかけあつて集める。

さて、皆どんな気持ちで参加しているのだろうか。

時々、「本当にしたいことを団活動でやっているのだろうか？」と、疑問を感じることもある。また、他の団員をみても一人一人の

ないことだと。

「おまえが団員の時、団のことについてそんなに心配し思ったか！？」と。なるほど団の事など別にどっちでもいいと思っていた。あまり面白そうでもないし。

今は、議長という立場をあまり運営していかなければならぬ、という考えから、自ら動き役員達と協力してやっている。

しかし、運営といっても、いったい何の為に誰の為にやっているの

河辺村振興青年会議： — 今、必要なもの —

河辺村 石 浦 睦 仁

考え方がまちまちで、何をやるにしてもしまいに人は人が集まらない。

情報が多様化し、人の考え方や価値感も多様化している今、これがいいと言いきれることが難しくなったのも事実だが。

ある時、一人の仲間がこう言った。

「人集めについて気にするのは、議長（団長）であるが故のことだ。」と。つまり、議長であるから心配し思うことで、それは仕方の

だろう、あんなこと。

公民館の行事運営の為、郡の連合青年団に参加する為、たしかにそうかもしれないが、本当はもっと他にやりたいことがあるんじゃないか？斬新なことが、他の活動を犠牲にしてもやりたいことが。

今の青年会議は、公民館又はその他の行事遂行の為の、歯車に組み込まれ過ぎてその枠から抜け出せずにいるように感じる。

行事にしても毎年おきまりの行



事である、それを消化してしまおうとするからいけないのじゃないだろうか？。

「しなくちゃいけない」でなくて、「したいからする」べきなのだ、と思いはじめた。当たり前だと言ってしまうはそれま

だ。青年会議をもって自由なはずだ。何かの制限をうけるなんておかしなことだと思う。（本当は自由なだけけれども、自由でないで勝手に思い込んでいるだけなのだろうか。勝手に自分達の行動に制限をつくっているだけなのだろうか。）

活動参加にしてみてもそうだ。参加してやりたいと思う者が参加すればいいのだ。本来、押し付けや強制などあつてはおかしい。

そして、参加している者が本当に楽しんでいれば、人も自然に集まってくるのが理想だ。

仕方がない。まあ、まあで、やっているから面白くなく人も集まらないのだ。

青年会議の教科書、そんなもの

あるわけがないが、教科書どおりの活動なんか、あえてしなくてもいいんじゃないか。

地域の人達には青年のイキイキとした姿が映っていれば、いいんじゃないか。地域のかかわり、といったそれなりの活動は考えられもする。河辺にしてみれば、毎年三月に行っている演劇の「ひなまつり公演」などは、だいぶ定着もしてきた。楽しみにしてくださる人もいる。毎年、百人近い人に公演を見に集まってもらっている。反面、マンネリ化と、団員の意欲の低下も事実だ。もっと自由な発想によるパワーと刺激が必要だ。そうした自由な発想はもはや苦手になりつつある、自分達の世代だ。

与えられた物を甘んじて受け入れ、つくられた枠の外に出ることを知らない。知っていても、あまり面白そうでないから、面倒くさいからと言って、やらないだけかもしれない…。やりもしないで勝手に結論をだすのが得意なのだ。

だから自分達には冒険という刺激が必要だと思う。冒険をして失

敗するか成功するか、どちらでもかまやしない、そこから何かつかめれば…。

やりたいことに賛同した仲間がやるだけやって、そこに生まれた連帯感、同じ目標に向かってやった仲間意識、やってみた者にしか分からないもの。そして、それらを吸収し自分を磨く。

青年会議の存在意義の一つに、その地域を担う次の世代として、必要な知識を学び、同じような世代、環境にいる仲間が互いにその

社会のなかでどういう立場に立ち、なにができるかを考える事のできる場所だと思う。

しかし、自分達が社会に対して何ができるかなどと考えた事は、多分あまりないだろう。「社会の為に」などというと、まるで気でも違ったのかといった目で見られそうなお時世だ。献身的に社会に尽くすことは、まるでバカをみることのように…。

だからと言っても、やはり、誰かがやらなければいけない。遅か

れ早かれ、自分達の手で村を活かしてゆかなければならないのだ。その危機感を感じつつ、その時十分対応できるだけの自信とノウハウを身につけるべきところだ。

例年どおりのやり方だけに溺れていてはいけない。流れていない水は、やがて腐る。自分という人間もこのままじゃダメになる、という危機感を感じなければ。

青年はそうした自分を磨く場と機会を求めべきであり、それを包む社会は与えるべきだと思う。今、青年は数も少ない。しかし、それらを軽んじ刺激や機会を与えずにおくと、青年も腐るがやがて社会も腐るだろう。

青年はもっと自分に自信を持つべきであり、青年としての自己主張を持つべきだ。

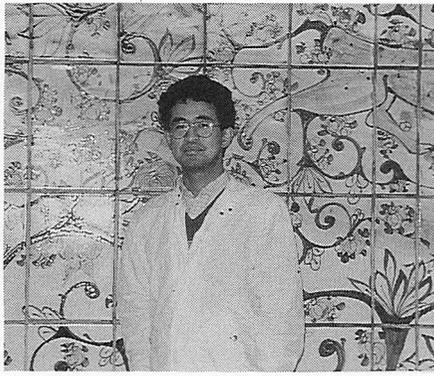
今の村にないのは、活気だ、特に若者の。この原因が青年だけにあるとは言いがたい。これからの村を活気のあるフレッシュな村にするには青年の、これから生き生きする者の、行動力が不可欠であると思う。そしてそれらをバックアップする力が…。



周桑郡丹原町は、松山市より東へ車で一時間余り、国道11号の桜三里を抜けると、南西に広がる扇状地が緩やかな傾斜とともに、現われてきます。

温暖な気候と比較的天災の少ない恵まれた土地柄に、純朴な人柄「まさに、農村」の顔がとてもお似あいな町です。

そんなわが故郷、丹原町には、丹原・徳田・田野・中川・桜樹の五地区に青年団があり、活動（停帯している所もある）しています。私がその中の丹原青年団に入団したのは、十二年前の二十歳の時です。地元の高校を



青野 敬治さん

出てそれまでの二年間、「何んで青年団に入らないかんの」と断わりつづけてきたのに、たまたまその年の団長さんが近所で、小学校の頃よく遊んでくれた先輩で、どうしても断われなくて、しぶしぶの入団でした。

初めて参加した時は、みんな和気あいあい、一人違和感がありました。知らない人の前では、無口（知り合いの前では、六口）な

来たこの頃が、自分には一番に合っていたように思います。

ところが、入団して三年目に、口数の多さが災いして、団長を押し付けられ、今までの立場が一転。しかも、何をどうしていいのかわからないので、公民館と先輩の家へ相談に走り回り、青年団活動が生活の一部となってしまいました。当然、行事も考える余裕など全くなく、前年とほとんど同じ、

ああ！我が青春、地域とともに…

丹原町

青野 敬治

為、慣れるまでに時間がしばらくかかりました。でも、慣れれば、もうこちらのもの。好きかって言

いたい放題、だんだんと青年団にのめり込んでいきました。

その頃の主な行事は、毎週月・金の卓球、毎月一回の定例会料理講習、ソフトボール、盆踊り、キャンプ、公民館清掃、町民運動会、お般若はん（般若入れ）、旅行などでした。何も考えず、自由に

よく言われるマンネリ、ただ、がむしやらに突っ走るだけでした。

それが、団長を後一週間すればお役御免になれると、ウキウキしていた青年学級の最後に、双海町の若松進一さんをお招きして「青年団の活動のあり方と地域のつながり」と題して、講演していただきました。その中で、言われた「地域の人々と活動を共にすることによって自分自身が成長し、そ

れを地域の為に役立てることが青年団活動です。」という言葉がグサリと胸に刺さりました。今まで、地域と青年団のつながりなど意識することなく、ただ単に行事をこなせばいいとしか考えていなかったことが、ものすごく恥ずかしく思え、以後、この日の言葉が私自身を青年団活動にとまらせず、もっと多くのチャレンジへ…、もっと大きく地域へ…向けさせてくれました。

翌年、大胆にも「第十七回青年の船」に応募し、運よく合格。総理府（総務庁）から届いた一枚の内定通知書を手にした時は、天にも昇る思いでした。それから出航するまでは、忙しいながらもあっという間でした。五十日間の青年の船での体験を終えた時、ものの見方、考え方が大きく広がったように思えました。

● 当時のレポートより

「日ごろ、雑誌や写真などで見るものがあっても、遠い存在でしかなかったオーストラリアやニュー

ジーランド、その景色を目の当りにした時、絵はがきのような美しさに感動し、そこに住む人々の印象的な笑顔。何とも言えないゆとりが感じられた。トンガや西サモアは、さんご礁に囲まれた南国情緒豊かな国らしく、住む人々は明るく陽気だ。その生活ぶりは、数十年前（写真で見た）日本をほうふつさせるかのようであった。

〔中略〕

今、この「青年の船」の事業を振り返った時、うれしかった事、悲しかった事、楽しかった事…いろいろ思い出がよみがえってくる。しかし、最も心の中に残る思い出は、何と言っても人と人との出会いであろう。全国各地から集まった様々な職業や生活を持った三百八名の日本団員と、南太平洋諸国十カ国の代表として参加した三十八名の外国招待青年と共同生活を通して、人種・言葉・文化・生活習慣の違いを超えて話し合い行動を共にすることによって友情を深めていった。ときには、集団を重視するか、個人を重視するかでト

ラブルも生じたけれど、わずかの間に、共に笑い、共に涙することができるようになったのである。青年の船を通して、一つになった我々の体験は、外国招待青年との別れ、晴海埠頭での別れで終ってしまっただけいけないと思う。これからの人生の糧とすると共に、できるだけ地域の為に還元していきたい。」

以上



この頃より、地域を通して物事を考え、行動するようになっていたと思う。独居老人の給食サービスを始めるにあたり、弁当の運搬車の運転をと頼まれた時、素直に引き受けることができ、現在も継続している。

一方、青年団の方はといえば、この後二年間、連合青年団の団長を引き受けるのですが、以前にも

増して忙しくなりました。社会教育委員、公民館運営審議会委員…又、青年団上部団体では、西条管内青年団体連絡協議会理事、愛媛県青年団連合会理事：数多くの肩書きが加わり、夜はもちろん土曜、日曜に加え、平日の昼間まで会議が入りました。出来るだけ参加し



独居老人の給食サービスへ…

時、地元で何もしていないわけではありません。お手伝いながら、婦人会の運動会、愛護班、PTAの子ビッコリーダー研修会、クリスマスフェスティバル等、地域の人々と交流は続けていました。初期の子ビッコ達は、来年高考を卒業します。その中の地元に残った何人かが青年団へ入団してくれればと心から願っています。

青年団を離れた現在でも、新たな活動として「丹原若者塾」の名称のもと、丹原町を愛する面々が『このままで丹原はいいのか。自分達の次世代に少しでもすばらしい丹原を残そう』を命題に、「楽しくなければ町づくりでない、汗をかかなければ町づくりでない、知恵をださなければ町づくりでない。」と言う我々のモットーを守りながら地域の人々と接し、関わりを持つことによって波紋を投げかけていきたいと思えます。

たのですが、それでも参加できない会が多くありました。その上、愛媛県青年団連合会二十周年記念大会、国際青年の各種行事と何らかの会の郵便物が、毎日のように届けられました。この嵐のような

●「九島？」

私の住んでいる「九島」は、宇和島市から船で約十分の宇和島湾に在ります。周囲約十二キロメートルのこの島には、蛤、百之浦、本九島と言う三集落からなり、戸数五百弱で約二千人の人が住んでいます。



主な島の産業としては、陸では「みかん」、海では「養殖漁業」「小型まき網漁業」など水産業が盛んに行われています。しかし、最近特に、市内の会社へ通勤するサラリーマンも増えています。

●「青年団入団」

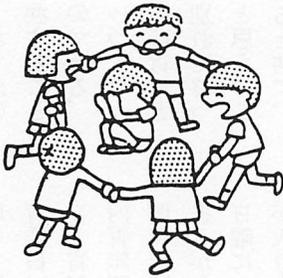
高校を卒業して、漁業という仕事に就いて、私の生活はそれまでとは一転してしまいました。昼間主体の生活から、夜間主体の生活に変わり、当初は体の慣れない日が続きました。そういった生活の中で、あたり前であるかの様に青年団にも入団しました。入団した理由とかは、特になく、島に残る青年はほとんど皆んな当然の様に

情熱……そして感動
今、九島青年団と共に!!

宇和島市 都築 孫弘

入団しています。子供の頃から島の友達とは親しく、海で山で、よく遊んでいました。特に同級生に

連合青年団というのは、島の三集落に蛤青年団、百之浦青年団、本九島青年団という単位団があり、

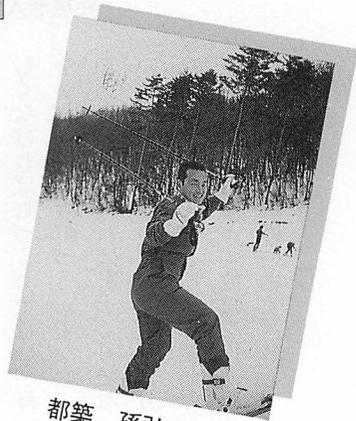


関しては、二十数年間も同じ島に住んでいると兄弟以上に親しくなります。そういった人間関係のまま青年団に入団するわけですから当然、団も活気あるものになります。そして、さらに、その後の数年で広く深いきずなへ…。

●「青年団？」

九島連合青年団、平成二年度団長というのが現在の私です。

その単位団の集まりが九島連合青年団です。



都築 孫弘さん

現在、団員数四十一名で、宇和島市内の六団体の中では、一番大きな団体となっています。また、四十一名の内、男性三十三名、女性八名で、更に漁業後継者は十九名います。全国的規模で見ると、この様に、第一次産業、特に漁業に従事している青年団というのは珍しいそうです。

●「地域と青年団活動」

どんな地域でも言える事だとは思いますが、特に、この「九島」では青年団と地域の行事を切り離しては考えられません。

単位団として、「秋祭り」や「初盆踊り」等々。連合青年団としても、宇和島での和霊大祭の「かき氷バザー」「キャンプ」や「ピクニック」など、さらに、青年団の演芸大会、国内研修旅行、島民運動会等々。地域行事のほとんどを青年団が担っています。このように、地域の人たちの青年団に対する理解度が高く、どんな事よりも最優先に考えてくれています。親の代、いや、それ以上の人たちが、島の人たちみんなが同じ様に青年団に育てられ、巣だちながら現在の人間関係、「九島」の姿があるという現実があるからです。

●「さらに、グローバルに：」

青年団のまとまり、地域とのつながりがあったればこそその大イベントが、昨年の十一月に行われました。

それは、「オーストリア国立ウィーン音楽大学」の大学生との交流会です。この島に、外国人が一度に四十人も訪れたのは初めての事だと思います。

「海のない国」、「海のない街」に生まれ育った人達と、海に囲まれた九島の青年、言わば対称的な人間が交流しようというのですから、ものすごく大変なものでした。しかし、それだけ有意義なものになり、団員それぞれに、何かを感じたと思います。



交流会の次の日、九島の視察として、養殖場を見学しました。その時に小さな魚を釣り上げ見せてみると、皆んな口をそろえて「かわいそう、早く逃して！」と言うのです。海で育った私達にとって、何でもない事なのに不思議だと思いました。

さらに、私が宿舎の廊下を歩いていたら、そこで、ウィーン的女性が平気な顔で着がえをしています。私は目を疑いました。何だか見てはいけないものを見た様な、得した様な、私の方が恥ずかしくなり、生まれた国の生活、文化、風習の違いというのは、物凄いのだと感じました。

この交流会は、私にとっても、青年団にとっても、そして、九島の人たちにとってもすごいカルチャーショックを与えたと思います。



●「これから」
団長になって、九島の事について考える事が多くなりました。これからの九島を背負って立つのは、若い力だと思ふし、そのために、今の青年団の時期に何を見、何をし、何を感じるかが、これからの私にも、九島にも大きく影響していくと思うからです。

島に生まれて、島に育って青年団で勉強し。

若さという情熱、一生懸命やり終える過程、それから得られる感動、地域と共に、そういう活動を：九島連合青年団の団長として、地域に、青年団に誇りを持ってやって行きたいと思ふます。

熱き若人の集い!!

— 第四回 全国いきいきむらづくり
青年大会に参加して —

(財)愛媛県まちづくり総合センター

宇都宮 正昭

富山県八尾町と言う田舎町から村営バスに乗る。これまでの平地の風景とガラリと変わり、急峻・急カーブ・草木のトンネルを抜けながら一時間余り……。そしてたどりついた目的地は利賀村。なんと大阪から五時間あまり。

利賀村は、一、一〇〇人程の純粹な過疎の山村である。ここで毎年開催されている。「国際演劇祭」「利賀そば祭り」は、あまりにも有名である。

九月一日〜二日の両日・全国からの元気な青年たちの集合する本大会に参加する機会を得た。

私は、かつて青年団の経験もないし、青年団活動についても皆無の状態であり、不安と年代のギャップを感じつつ参加したのである。

県内からは、新宮村青年団六名も、元気いっぱいに参加していた。

大会は、青年団の主催であり、団長の歓迎のあいさつ、「村づくりのネットワークを広め、二十一世紀に向かって頑張ろう」で幕開け。

☆ 基調講演 ☆

森 巖夫先生 (島根大学教授)

テーマは、「むらづくりは人づくりー青年への期待ー」内容は、国際社会の日本、地方が今後どのように、「地域づくり」に取り組んでいけば良いのか。更にその地域の青年たちが、何をすべきなのか。このことについて、全国的事

例から見た地方の在り方と地域で活動している青年の役割についての内容であった。先生は、全国津々浦々まで足を運ばれており、実例ありユーモアありの講演であった。

△ポイント▽

「ふるさと創生一億円」が起爆剤となり、地域おこしは花盛りである。と言うより「戦国時代」なのである。圧倒的多数の地域はうまくいってないのが現状である。

この事業は、国や県がモデルを示さず、「自ら考え、自ら行う地域づくり」が目的であり、その結果として、住民が参加するきっかけとなったようである。

「地域づくり」は、若者が定住できる条件を整備することであり、三つの条件がある。

① 産業経済を振興させて、所得を上げ、豊かでなくてはいけない。そして所得を上げる為には、

・ 色々な産業の相互の結びつきを強めること。「縦割り」「セクショナリズム」ではダメ。

・ 地域の資源を生かした振興を図る。

② 住みやすい町・社会生活環境の改善。

農山村社会は、都会と比べて、「心」が勝っている。うまく利用すれば、相互扶助・連帯感・共同意識が向上する。

③ 生き生きしている事。

地域に活力を付ける張本人になること。そのためには、「おもしろ真面目人間」となる事である。



☆ 「全国地域づくり裏方さん大会」一行と合流 ☆

この裏方さんとは地域づくり仕掛人を理解して支えている人々及び仕掛人自身のことである。

(裏方とは黒子役であると考えるところ、このネーミングはおかしい気がする。)

フリーテーマの「ティーチ・イン」では、パネリストと会場の論客を交えての討論会である。パネリストは織田直文氏(滋賀総研)仕掛人の立場で深見富紗子氏(愛知・足助町)そして中谷信一氏(利賀村)の御三方。

「本当にやめたいと思う事もありますよ」

「自分が魅力的にならないと、人(情報)の出入りがなくなる。」

「地域の人は考えるほど、信頼も期待もかけてないのが実態だ！」
等など、本音の意見も活発に飛びかい、熱気を帯びてきた頃、タイムアップ。

☆ 熱気に輪をかけて ☆

午後七時・さあ交流会だ。ムードが変わってこれからが本番。森先生曰く、「シンポ」の意味は、「親しき友と夜を徹して酒を酌み交わしながら語り合うことである」と。

ネットワーク・情報力に乏しい私は、ネットワークの量を追い求めるしかないのである。どちらかというと好きな酒。全国の銘酒に舌鼓をうちながら、酔いに任せて話も弾む！四時までやった人もいたとか。

☆ 頭スッキリ？二日目は…☆

「利賀国際キャンプ場」に会場を移して、グループ討論会。テーマは、リゾート・国際交流・イベント・魅力ある町づくり。我々のグループは、テーマが大き過ぎて、結論に至らなかったが、切実な嫁不足の問題、青年団の後継者問題まで発展して活発な意見交歓会となった。

☆ あばよ・利賀村 ☆

全員が裸足になり「ワイワイ！キャーキャー！」慣れない手つきでイワナの掴み取り。炭火で焼きながら、昼食。そして最後は、青年団員による「友好のトンネル」。心地よい惜別を感じながら…。



☆ 車中にて ☆

◆利賀村青年団の団結・行動力
そして丁寧な歓迎ぶりには、感銘を受けた。その背景には、「伝統の力」は、もとより、行政の青年団(若者)への期待の大きさも感じられた。要するに、若者が定住できる町を作るには、

若者は夢を語り、住民・行政は若者の意見を積極的に取り入れる姿勢を示す事が大事である。

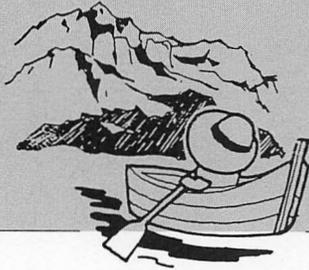
◆「過疎・過密」の問題は、表裏一体であるが、日本の政治経済の肥大化が生んだ落とし穴のような気がしてならない。

◆ネットワークを深め、情報交換することによって、「生き生き人間」が誕生するのである。しかし、森先生曰く、「ネットワークは重要ですが、それ以上に足場を固めて、地元で浮き上がらないように」が、印象に残ることばであった。



第六回 水郷水都全国会議

テーマ ～水と森林～



(財)愛媛県まちづくり総合センター

山岡 強

◎はじめに

第六回『水郷水都全国会議』が残暑きびしい八月二十五日～二十六日にかけて、栃木県小山市の文化センターを会場に開催されました。

この『水郷水都全国会議』は、一九八四年に琵琶湖の水質汚濁に直面していた滋賀県によって、世界にさがけて開かれた「第一回世界湖沼環境会議」が契機となつて生まれたものです。その時に全国各地からはせ参じた住民運動の代表者たちが話し合い、「国内版の湖沼環境会議」を組織することとし、翌年の一九八五年、六道湖・中海の淡水化反対運動が燃え上がった松江市で第一回大会が開かれました。それ以来毎年、土浦市・富士市・中村市・柳川市と会場を移しながら開催されてきました。今回のテーマは「水と森林」で、わが国の水環境が直面しているさまざまな重要課題について論議が展開されました。

以下は、今回参加した私の、とりとめのないレポートです。



◎開 会

開催県である栃木県は、その北西部に那須・日光の山々を擁しており、国立公園にも指定されています。そしてその深い森林によって育まれた豊かな水は、那珂川・鬼怒川・渡良瀬川・思川となつて関東平野をうるおし、首都圏の貴重な水源ともなっています。この関東平野のみならず、今や全国的に森林の乱開発や生態系の破壊等によって、水をめぐる環境問題はより深刻な社会問題として、広く

認識されつつあると思います。しかしながら、その具体的な運動はまだ十分とは言えず、これからの私達の行動に大きな期待が掛けられていると言わなければならないようです。

◎基調報告

先ず初めに、今会議の実行委員長である「栃木の水を守る連絡協議会」の石神正浩氏より、同協議会発足の経緯とその後の活動状況、栃木県の現状等の基調報告が行われました。

- ・ 緑のダムと呼ばれているブナ林の伐採
 - ・ 地形的に無理な山肌へのスローパー林道の建設
 - ・ 総合保養地域整備法（リゾート法）での自然の乱開発等々
- 確かにこれらの開発は、全国的にもすごい勢いで、私達の身近な所へ迫ってきています。そしてそのことに気付いた時には、もう手遅れの状態になっているという事は言うまでもないようです。

今回の会議では、更に一歩踏み込んで、「自然と結びついた農山村の経済発展はどうあるべきか」「リゾート法の出できた政治的・経済的必然性がどこにあるのか」を明らかにする必要があるという投げ掛けもされ、この二日間が更に熱くなりそうな様相を呈してきました。



◎特別報告

特別報告として、栃木県自然保護団体連絡協議会・藤原信氏より「森林の水涵養機能について」、岩手大学、岡本雅美氏より「利水を中心に考える首都圏水系の水問題」、そして北海道指導漁業協同組合・柳沼武彦氏から「樹を植えて魚をふやす」という報告がされました。持ち時間が少なかつたために、それぞれの方、十分な報告ができなかったのでは？と思いますが、特に柳沼武彦氏の「樹を植えて魚をふやす」の報告では、あれだけ自然が豊富だと思っていた北海道でも、河川をさかのぼって内陸へ内陸へと開発が進められており、自然のサイクルは崩れてしまいサケも帰ってこないという現状に、本当に他人ごとではないと考えさせられました。

◎第一分科会「水系の保全」

分科会の会場となった思水荘では、先程の特別報告でも出ておられた藤原信氏と長良川水系を守る会・三島真氏の両氏により報告が

なされ、その後、会場との活発な論議が交わされました。

ここでもやはり、大きく取り上げられたのはリゾート開発に関する問題点であり、今や、保安林までもターゲットとするリゾート法や、特別措置法の廃止へというものでした。

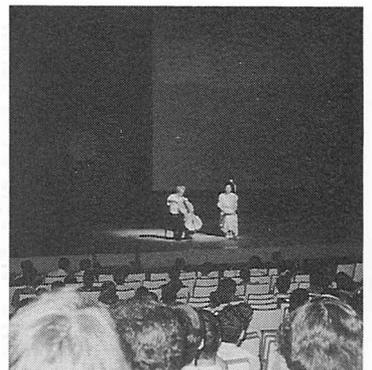
◎第六分科会

「水汚染と水の再生」

近年特に騒がれている地下水の汚染については、ゴルフ場開発だけでなく、産廃処分場との関係も大きく取り上げられています。

産廃処分場がもたらす環境影響には、造成時の自然破壊、土砂流出による水質汚濁、ダンプ走行による排ガス汚染や騒音等々数えあげたらきりがありません。しかしいずれにしても、私達の命に直接関わる問題だからこそ、もっと真剣に、もっと深く考えていかなければならないんだと思いました。

今回初めて参加した、この『水郷水都全国会議』で、本当に今ま



で他人ごとのように思っていた水環境の問題が、実は私達のすぐ近くまでやってきているのだという事実が、改めて考えさせられる思いがしました。そして、何よりもそう確信させたのは、今回の事務局を、主婦を主体とする「とちぎCOOP生活協同組合」が担当したという点です。ですから水と接することの多い女性の参加がなんと多かったことか。

私達が毎日飲む水、そして排水にももっともって関心を持ち、私達の生活から切り離すことのできないものだからこそ、考えていく必要があるのでは…。

とにかく考えさせられる二日間であった。

まちセン

今昔物語... PartI

今治地方局

山本均

まちづくり総合センターを出てから二年半。当時を思い出すと、頭がボーッ、耳の奥でプツン、コロナと脳の部品が落ちる音がするのであります。

六十一年七月のセンター設立以降、宮本所長以下全職員が、自由かつ雑然とした雰囲気の中で、議論ばかりしていたような気がしません。しかし、皆の話の中には、「これは面白い、こんなことほでないか。」といった発想が常にあり、「それは〇〇だから無理だ」とかいう逃げ腰はなかったものと評価しております。

センターの仕事はこうあるべきとのコンセプトを提案する宮本所長、それに首をかしげ文句をつける私、そんなことよりあれをやらうと言うU研究員、それじゃ他の人にも知恵を借りようと走るI研究員。全く楽しい毎日でした。

私が、センターや地域のために何か役立てたか、というところ、それは特にないと自己評価しておりますし、一方、そんなの当然と割り切って知らん顔して生きて来まし

た。

逆に、私がセンターや、地域づくり研究会の方々を中心によくの方に教わって頂いたことは非常に大きく、今後の職業生活、人生に多大の影響を受けたことは間違いありません。

そうしてみると、得をしたのは私だけ、という結果が残りました。実に有難く、申し訳ないことです。



私、最近、係の若い職員に言ったのでありますが、

「なあお前、まじめにやるのはええが、自分というものを犠牲性にしてまで頑張ることはないぞ。」

誰かが言うとしたけど、大切な

何かを犠牲にして達成した成果なんぞは所詮『本物』じゃない。何もかも満足できるような欲ばって人生を楽しまないかんぞ。」



センターでは、地域活動のリーダーの方々から多く学ぶところがあつたことが一点。それともう一つ、恥ずかし気もなく文章を書くようになったのもセンターに居たおかげです。

人は、印刷物をどういう順に見るかというところ、もちろん自分の書いた文章です。次に知人の文章、その次の自分の興味のある分野、それ以外はほとんど読み飛ばすのではないのでしょうか。だから文章を依頼されて、深刻に悩むことはやめました。

地域づくり活動のリーダー達は「目的」というものを極めて明確に認識し、「戦略」に従って行動している人達だと思えます。

この文章に限って言えば、舞たうん編集者の目的は、もちろん冊

子のページが期限内に活字で埋まることであろうし、私の目的は活字になった自分の文章を読んで、思わず舌を出すというスリルを味わうということに外なりません。こういう歓びを与えてくれて、有難いことであります。



舞たうん18号に、守谷和久氏が出雲神吉先生の名前を挙げておられました。

すると早速、出雲先生から私のところに手紙を頂きました。

「待つ」ことによる開眼という、誠に不可解なテーマのお便りでした。「待つ時に、脳裏を血がかけめぐり、そして寿命を知り、天恵を知り、健康な人生を歩む事を知り得ます。」とのこと。

相変わらず、訳のわからないことを言われるが、私なりに解釈して、人間と動物の精神構造の違いは、感情と行動の間に「思想、意志」といったものが介在し、その比重が高い、それを「待つ」と表

現されているのかなと思います。茶道では「間」ということをよく言われるようですが、これも同じようなものなのでしょうか。

出雲先生のことを思い出しますと、講師をお願いに行った初対面の時のこと。

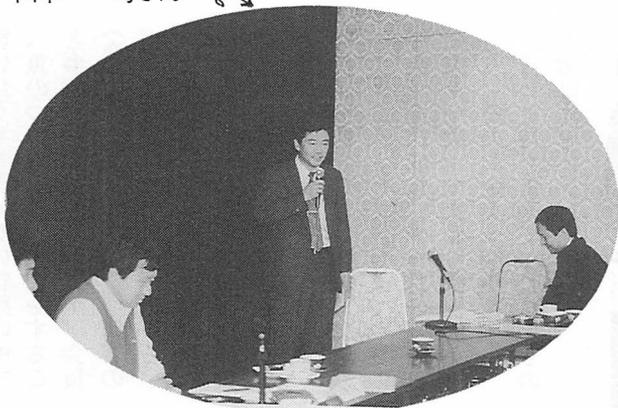
「それは面白い会ですね。是非出席させて下さい。こういう会に出て行くのはぼくの勉強になるんですよ。自分がそれぞれ会いに行かなくても向こうが集まって来てくれるんですから。」

別れる時には、
「この会は、きつとうまくいきますよ。流れをきちっと作っておけば自然に成功するんです。」

全く、確信に満ちた講師の引き受け方でありました。私は現在までのところ、こういう引き受け方のできる講師を知りません。県内では、双海町のW氏がいい勝負とあったところでしょうか。

出雲先生は、人の意見を聞いて「それは違う」とは言わない人でありました。

山本 均さん



「なるほどなるほど、よくわかりました。あのね、あなたの言っているのはこういうことなんですよ...」
つまり、まちにも組織にも寿命があるんです。そこをきちっと押えて進めれば必ずうまく行きますよ。」
最後は、必ずうまくいく、ということになるのであります。

センターにおける革命的出来事といえば、U研究員が金沢の出島二郎氏を講師に呼んで来たことであつたと思います。

昨年に内子に来られた時、再びあの鋭い発言を聞く機会に恵まれました。

「私のまちは小さい...。」という発言には、

「小さいというが『どこが』小さいのか。データに出ている小さいことは何も問題ではない。小さいという『幻想』は抜きにして考えよ。」

ある建築設計の方が自分の建物について謙虚な反省をされると、「自分の作ったものを反省して悩んで何になるか。私はクライアंटに判断を求められたら迷わず自分の意見を押し通す。相手が迷って判断を求めているのに、私が迷っていてどうなるのか。結果の良否は大衆が決めてくれるのだ。」

いろいろあるから人生楽し。センターが、みんなに楽しいことを提供してくれますよう、期待をしております。

スタート

昭和34年夏、私は病院のベットに寝ていた。別に苦痛ではなかった。柔道をやりすぎたといえは聞こえはよいが、50kgしかない私の体に合わなかったようだとは今はわかる。

一年ほど寝ていた。寝ながらカラコルムを夢見ていた。ヘルマンブールのナンガパルバット登攀について何度も何度も読み返していた。

またその頃、朝日の特派員、浦松佐美太郎の文章に出会った。本の名を『たった一人の山』と言う。彼はスイスアルプスについて、また、スイスについて、実に慎重深くその素晴らしさを語っていた。アイガー西山稜の初登攀者でもある。

かくして東京に出て山に登った。東京は、山登りにもっとも便利な土地であった。東京に出て、梓川に出会い、穂高に出会った。その時の仲間に河内紘一がいる。至福の時間の中を二人共泳いでいた。

昭和51年アラスカマッキンリーを最後に、激しい山行きから遠ざかった。つまり登る必要がなくなった。



近年、川づくりの模範生としてのスイスを訪ねる機会を得た。大正時代の浦松佐美太郎のスイスが厳然とそこにあることに驚き、日本はもう手遅れなのではあるまいかと非常な不安に襲われた。しかし、もう手遅れである。

哲学もなく、節操もない競争原理だけの社会を個体としての国家と呼び得るであろうか。山河を食いつぶし、自己増殖を無限に続ける癌細胞と同じく、決して一個の個体生物とはなり得ない。

父親達がつくり共犯者としての私に出来る仕事はそう多くない。また残された時間も少ない。

三百年くらい頑張ればなんとかなるかもしれない。ほとんどが犬死に近い。しかし出来るところから始めねばならない。なぜなら、行って初めて知った事になるのだから。

父よりの手紙

二人の娘へ

五十崎町 亀岡 徹

私の高校時代とはかくのようなものであるから、学校そのものにあまり感慨がない。学校が学習するところであるとすれば、私は適切な生徒とは言いにくい。元来怠け者に出来ており、知識という道具をコツコツとポケットに貯め込む作業が苦手であった。「知識とは自分の内面に普遍的な価値を作るときの道具である。目標や手段にはなっても目的にはなり得ない。つまり自分の祖先は猿であることをズッシリと認識するには知識だけではどうにもならない」と言う横着な考えをもっていた。今も半分はそう思っている。

大切なのは、これから

—いわぎ村づくりシャベリング—

(財)愛媛県まちづくり総合センター

豊田 渉



シャベルはスコップの大きいもの。これで、住民の声や村づくりの情熱を掘り起こすという意味を込めてつけられたものです。話をする、しゃべるということも入っているとは思いますが…。

★リゾートとどう関わるか

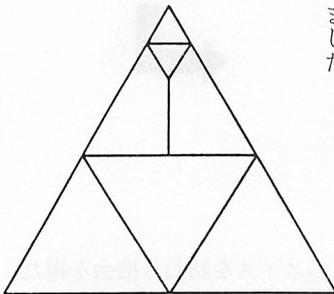
日本列島はリゾート列島の如く、リゾート構想がひしめいています。リゾート法により、愛媛県においても海岸部を中心に「えひめ瀬戸内リゾート開発構想」が六月二十九日に国の承認を受け、十の地域が重点整備地域の指定をうけました。

そのうち半分を島が占めていて、岩城村においても無人島の赤穂根島にリゾート構想計画があることをご承知のとおりです。

「リゾートとは何か。リゾート

と地域住民はどう関わったらいいのか。住民としての立場から、将来どうあったらいいのか。そのために、現在何をすればいいのかを考えた話し合い、行動していかうという願い」で開かれたのが、「いわぎ村づくりシャベリング」です。

九月十六日、会場である岩城島開発総合センターには、村人を中心に大勢の人々が集まりました。この企画をしたのは、村人を中心に構成する実行委員会の方達。兎角、口ではよく言う人の多い中、行動に移すことの大変さというのはいと思います。動くことの大切さというのを改めて実感した日でありました。



いわぎ村民シャベル実行委員会

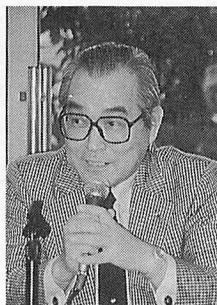
★基調講演

「リゾート時代に向けて

地域産業のあり方」

佐藤 仁威さん

(株)日本企画研究所長



なぜ今、リゾートなのか。それは日本の産業構造の自身が変わってきている。鉄鋼や自動車産業に比べ、旅行・外食産業・余暇市場が急速に伸びてきた。そこに民間活力を生かしたリゾートが出てきた。ただ人だけ集めるような観光リゾートでなく、地元の人にとしたら金が入るかを考えないといけない。

私達の身の回りには、今までになかった市場が伸びている。グルメベビーマーケットや早朝マーケットの誕生、ニューリッチという新しい金持ち層や一生結婚しない男と女のシングルライフなどが増加している。

★シャベリング

世間で今、話題になっているものは一体何だろう。イラク問題・リゾート問題・シャベリング。えっシャベリングが解らない。では、紹介しましょう。

このシャベリング。生まれは、越智郡岩城村。まだヨチヨチ歩きで、今回が初めての披露です。シャベリングとは勿論造語であります。

地元の持っている地域性や歴史性は財産である。この岩城村には凄い歴史性があるが、それを何にも使っていない。だから皆さんが豊かに見える。豊かなら何もしくてもいいのじゃないかとも思う。やる以上は地元でできることは、地元でやり、できないことは大企業にやってもらえばいい。そして、開発原理を決め地場産業にどうやればプラスになるかを考えて、それを柱にして絞っていくことが必要だろう。

★パネルディスカッション

守谷和久さんの司会によって、進められました。以下、要旨を報告します。



●石川 順二さん
伊予三島市出身。昭和六十二年十月、夫婦二人で、長さ十一Mのヨット「順和号」で伊予三島港を出港。ハワイ・カナダ・メキシコ・ポリネシアなど太平洋を二年九カ月かけて一周し、今年の六月帰ってきた。



世界を回ってきて感じたことは、リゾートは金持ちの遊び場であると思う。我々には不便だと思われるようなところが、最高のリゾートで、日本人の思っているものとは随分と違う。地元の人が仕事をしてお金を得ているとは思えなかった。最終的には地元がイニシアチブを持ち、コンセプトを大事にすることだと思ふ。

この燧灘は、日本一の海域だ。島で欲しいものは、ウォーターフ

ロントの遊びで、それをいかに有効に使い、大切にしていくかではないかと思う。

●熊高 昌三さん

広島県高宮町では、「全町公園化構想」を提唱。今年七月に民活導入の「広島ニュージラード村」がオープン。その中には町有の農村体験交流施設「レインボーファーム」もある。また、地域の特長を生かした農村型ミニリゾートを地域の自治組織のアイデアで開発する計画がある。その代表が川根地区であり、熊高さん達が企画し、推進している。



ブームの中で五年先、十年先はどうなるか解らないが、その地域にしかないものを作っていくこと

だと思ふ。そして、住んでいる人が経済的にも精神的にも豊かになることだろう。自分達がどうなりたいたのか、どうしたいのか、ここだけでなくいろんな会にどんどん出ていってみたい。

★これから期待

今回のシャベリングは、初めてのことであり、まだまだこれからという気がします。もっとももっと討議がなされ、やはり最終的に決めるのは地元の人達です。最後にフロアからの意見を、

「リゾートの語源はしばしば行くということ、都会に媚びる田舎ではいけない。堂々と田舎であるというところを作りたいと思う。どんなリゾート地を作るよりも、ここでどういう生き方をしているか、この島でどんな生き方を将来することが、本当に豊かだと思えるのかをまず話し合っ、うちはこういう特性があるから、それを売っていかう、リゾートにしたいこうみたくなされていくべきだと感じた。」

またして旅の話から恐縮ですが…、この夏、お盆前の三日間、大山・小国・湯布院を巡る『九州／町づくりトリアングルの旅』をしてきました。同行は雑誌編集長のK、建築士のA、K商工会経営指導員Wの三兄たち。湯布院では「鎌田宏史兄／追悼の夕べ」と…酒供養。いずれレポートする予定ですが、私には凄くインパクトを受けた旅でした。

「見学者ブームの感／小国」

ともあれ、その興奮のままにお話したいのが、今回で三度の訪問となった小国町なんです。この町の人は「小国は九州のほぼ中央に位置し…」と案内しますが、私には何だか『九州の重心位置だゾ…』と聞こえます。

阿蘇の北外輪山と九重連峰に囲まれた人口約一万人のこの盆地の町は、今や見学者ブームの感なんです。理由は、古くから小国杉の名で通った良質の杉を活かし…、それも成木でなく間伐材を使った超近代デザインの建築物。例えば『Uステーション』とか『小国ドーム』とかと、洒落た呼び名がピッタリの「バスケンター」や「町民体育館」等の施設群が、全国の建築専門家や地域づくりの人たちの熱い視線を集めるからなんです…ネ。

「町政策を探る／五つの興味」

私の興味は五つでした。その第一は、良材／小国杉を活かしてきた伝統の工法から飛躍し…、間伐材を主とした『木造立体トラス構法』を使う等、ユニークなデザインをこなす新しい工法を、地域が産んだことです。

第二は、町がそんな奇抜な公共施設群を、「観光開発」のためでなく、地域の人びとの『日常生活施設』として、しかも設置地区を散在させながら設けたことなんです。

第三は、木造の大型建築物を造るため建築

地域づくりの学んで三年もはやま話ノート

第五話／小さな町の大きな未来戦略の話

えひめ地域づくり研究会議

宮本俊一

基準法に挑戦。これを各種の調査・研究でクリアして、新しい諸々の技術を開発したばかりか、その技術を町に集積し、地域産業の新チャンネルを拓き始めていることです。

第四は、新生生の型破りな公共施設が…、例えば『手づくりの館』とか、物産館『ぴらみっと』等が造られたとたん、これまた全く新しい生産活動。例えば、ジャージー牛の飼育によるバターやチーズ。黒豚飼育によるハムやソーセージ等々が売り出される…。そんなソフトが仕掛けられていることです。

第五は、町民研修施設『木魂館』が町内外

や国際交流の場となり…、台所を預けた地区のお母ちゃんグループ「ピッコロクチーナ」（イタリア語「小さな台所」）が、神戸の料理研究家に学び、地場素材で欧料理等三〇余種を創って人気を呼ぶ等…、その施設運営の妙です。

「住民志向の町政基本戦略」

つまり、これまでの小国の地域づくりは、公共施設によるハード・ウェアが切り口です。私の興味は、町の『地域経営政策』に絞られたんです。そこで昭和五十八年から町長として『悠木の里づくり』を目指し、そのシナリオの展開をされたきた宮崎暢俊さんのお話に、小国町政の『基本戦略』を探って、私流の…俗な理解をしてみました。

その宮崎町政のスタートは、林野庁の補助で進んでいた「町民グラウンド」のブロック管理棟等を、木造に直させることからでした。つまり「町の大切な資源／小国杉を、未来に生かしてゆくには、何よりも町の人びとが、小国杉で新しい時代を生きる…愉しさと誇りを味わうことだ…」が原点なんです…ネ。

そこで「そのためには、町づくりの公共施設等こそ、近欲に観光施設などと考えないで…、優先的に町の人びとの日常生活施設に当て、建設地も町内各地に分散させて、広く

町の人びとに新しい小国杉の活かし方に馴染んで貰うことだ」と、考えられたんです。

従って、その建設に当たっても、計画の段階から『住民参加』を工夫し、普通の町の人の中から施設に応じた適任者を選び、町職員を加えた五人ほどの『町民プランニングチーム』を設けて、その運営や設備・器具の整備等「ソフト・プラン」を研究・提案して貰うんだそうですが、そればかりか、この研究活動で育った若い人を施設の責任者に起用して、運営成果を挙げているんですね。

例えば、木魂館の館長もこうして育ったUターンの農林業青年で、ピッコロクチーナも若い彼の理想が生んだ独創的発想と、熱意溢れる行動力の賜だと、誇らし気でした。

「管見／宮崎町政の根っこ」

しかし私の感動は、そうした「政策的発想」よりも、宮崎さんの言葉の端々に覗いた「政策理念」というか、その根っこにある『基本的姿勢』のようなものに触れたことでした。それをまた私流の俗理解で描くと、次のような心象風景がイメージされました。

その第一景は、ご先祖から受け継いだ地域資源は、今を担う世代として次の世代に伝えねば、ご先祖に対し申し訳がないとの想いです。しかもその資源は、ただ守るだけならそれがどんなに立派な物でも、日々新しく流

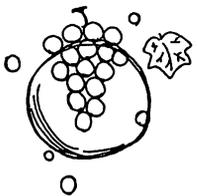
れる時代に取り残され、やがて『亡んでしまふ』という危機意識があるんです。

第二景は、だからそんな大切な資源には、絶えず新時代に活かす新付加価値を培って、時代に即しより立派に育てながら、次の世代へ伝えたいという想いです。しかもその付加価値は、『田舎だからこの程度で』と言うのでは、流れが加速している時代にすぐ取り残され「守りと同じことになる」。従って、何処にもない「オンリー・ワンの一流を目指す」という真剣な本物志向です。

そして最終景は、ご先祖からの資源／小国杉は「物」。その杉を育て価値ある物としてきた知識や技術は「人」。人に付加価値をつけねば、新しい物の付加価値は生まれません。その人への付加価値、新しい知識・技術を、との想いなんです。それはオンリー・ワンの一流目指すから、そのレベルを支える『地域の生活文化』水準を高めねば、という、強烈な使命感の実践意欲なんです。

とは言え、小国の町づくりは始まって、まだ七・八年。言わば、地域づくり活動では序足の域で、これから本番なんですよ。でも私には、次のようなこ

れまでの記録から、「確かな小国未来」への新しい地域活動のベクトルが育っていると思えるんです。



『悠木の里づくりシナリオ展開記録』

— (昭和六十年から平成元年まで) —

一、悠久の年輪を刻む小国杉による地域デザインづくり／「木造立体トラス構法」ゆうステーション・林業総合センター・小国ドーム／「在来構法」北里博士記念館・家畜市場・小国学園複合施設・商工会館・木魂館／「ログハウス」モデルログハウス／「その他地域デザインづくり」

二、悠々と噴き上げる地熱の活用による地域開発／地熱利用人工造雪・野外生産試作場・養魚場・枝物促成栽培場・老人憩いの家

三、悠然たる大自然活用による観光地づくり

四、地域資源の活用による特産品づくり／小国杉・阿蘇高冷地野菜・シャージーン牛・間伐材加工所・手づくりの館・特産品コンクール・木造建築コンクール・乳製品加工施設・物産館びらみっと

五、町民手づくりのイベントづくり／スギトピアまつり・ふるさとまつり・鯉のぼり祭り・小国文化祭・美術フェスティバル・映画祭・わが家の腕自慢料理コンクール等々

六、未来に挑戦する小国人づくり
おぐにみらい塾・木魂館活動・町民プランニングシステム・町民提案制度・地域づくりアドバイザー制度・リーダー養成派遣研修制度・地域づくり研究費助成事業 等

どっこいみんなの奉納芝居

川之江市市川滝公民館主事 吉岡達也

★山城神社

「山城神社」は、川之江市市川滝町領家地区にある氏神様である。

国道一九二号線を遥か下に見下ろす法皇山脈の中腹に、大きな樹木に囲まれた狭い境内がある。狭く古い神社ではあるが、余所ではあまり見かけない花道付きの立派な舞台小屋があるのが特長である。

普段は静かな山の中のこの神社を中心に、領家地区の人達は年に一度、十月十五日の秋祭りの日に一つになる。いや、正確には秋祭りに行われる「奉納芝居」に熱くなると言ったほうが当たっている。

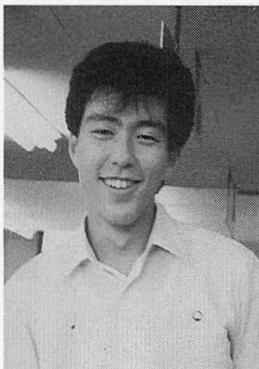
★復活した奉納芝居

山城神社では、江戸時代（文久二年（一八六二）と書かれた衣装箱は残っているが、定かではない）より秋祭りに玄人の旅芸人を招いて、芝居を奉納していた。それが、

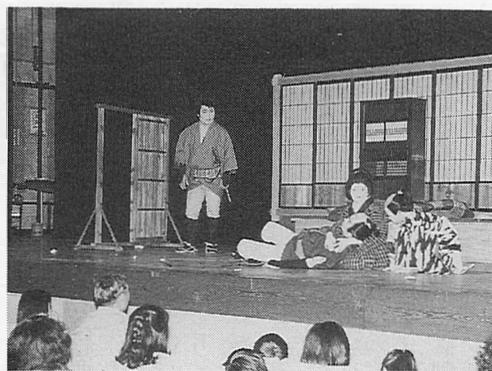
昭和三十八年からテレビの普及や

その他の問題で途絶えてしまった。しかし、地元の人達には子供の頃、家族揃って弁当を持って見に行った芝居の楽しかった思い出がずっと心の中に残っており、芝居のない秋祭りに物足りなさを感じていた。

そんな思いが高まり、昭和五十七年に領家愛護班（現在は、山城神社奉納芝居保存会）により、芝居が復活したのである。しかも、主役・脇役などの役者も全てが地元の人で、手作りというすばらしい形で復活であった。



吉岡 達也さん



★見事な芝居の陰で……

素人芸人の芝居とはいえ、下手なプロも顔負けの見事な演技を見せてくれる。それは、昨年開催された川之江市郷土芸能発表会での会場の反応を見れば一目瞭然であった。

初めて見る人が殆どという満員の客席からは、一種のざわめきが「あの人は素人じゃない」「あんなに台詞を覚えられるはずがない」と言った声があちこちで聞こえてきた。それほど完成度の高い素人芝居だったのだ。

それほどの見事な芝居を見せる役者や裏方さん達は、それを納得させるだけの準備・練習を十分にこなしているのだ。夏休み中に台本を取り寄せ、昭和五十七年からずっと芝居の指導を続けている、市内中学校教員の宮内先生が脚色をする。それが出来上がるとお盆過ぎには稽古に入る。九月初旬に



舞台を開け、一日おきに練習。十月に入ると毎夜に集まり、最後の調整をして本番に備えるのである。この二カ月余りの準備の間、社務所には役者の家族・役員・近所の人達が自主的に、ごく自然にお



★地域の固いきずなへ……
 いよいよ秋祭りの本番。幕が開くと満員の客席から、「待ってました！」の掛け声が飛び、主役の登場ともなれば、「いよっ、日本一！」の声と一緒におひねりが飛ぶか。舞台の上と下、役者とお客に別れてはいるが、殆どが毎年

の顔馴染みなのだ。それぞれが、自分達の芝居を楽しんでいる。

「山城神社の神様は芝居が好きなんじや。」役者の一人が、そう言った。でも神様以上に領家地区の人達の方が芝居を愛し、地域を愛しているのだという気がする。



おしらせ

宇和盆地より霧のベールに包まれたようなメッセージ（ご案内）が届きましたのでご紹介いたします。

『秋色いっぱい』の11月3・4日の両日、宇和町で“EPICセミナー”を開催いたします。このセミナーは、県の国際交流センターの呼び掛けで、県内在住の外国人の方を県内各地域に招き、地元の人たちと膝を交えながら語り、ふれあう中から草の根の国際交流を目指すものです。これまで城辺町・城川町・新居浜市・中山町等へのアプローチをとっかかりにストレートな国際交流を願い、他市町村とは一味違った形で…、たとえば宇和名物「なます粥」のイロハ…、過激な「なます獲り」から味付け、そしてダイナミックな味わい方などの体験交流などを…もくろんでおります（現在、企画中）。みなさんご一緒にいかがですか？

ご案内は…宇和町企画商工課 小玉まで
 ☎ 0894-62-1111

「第5回国民文化祭・愛媛90」を記念して、
 「愛媛の郷土芸能・文化データベース」を設けました。

“文化の国体”とも言われる国民文化祭が、当地愛媛県で開催されるのを記念して、ECCCでは、愛媛の郷土芸能・文化をこの機会に県内外の方々に広く知っていただこうと、パソコン通信ネット「TOWNタウン」に、「愛媛の郷土芸能・文化データベース」コーナーを設けました。

ここでは、国民文化祭の開催日程や会場別案内をはじめとして、愛媛の郷土芸能・文化を①郷土芸能・民謡、②年中行事・まつり、③史跡・文化財、④郷土料理の4項目に分けて紹介しています。

これらのデータは、愛媛県が行った生活文化マップ作成基礎調査報告書を基に、300件余りのデータをECCC会員の有志で組織したデータベース作成委員が入力したものです。

紹介されている内容を見てみると、私たちの郷里にはこんなにも豊かな芸能や文化があったのかと、今更ながら驚かされるとともに、あまりにも郷里の文化について知らなかった（無頓着だった）自分が恥かしくさえなりました。また、私の郷里だけだと思っていた五つ鹿踊りが、ほぼ県下一円で行われていることを知り、おもわず鹿踊りのルーツさがしに興味をそえられるということもありました。

みなさんもぜひ一度、このコーナーをのぞいてみてください。（このコーナーは、ECCCの会員にならなくても、誰でも“ゲスト”で見ることができます。）

☆☆「愛媛の郷土芸能・文化データベース」コーナーの設置場所
 パソコン通信ネット「TOWNタウン」
 回線番号：(0899) 23-1144 (代)
 プロトコル：

道 順：トップメニュー → 3番オフィス街
 ↓
 30番のコーナー

TOWN タウン
 パソコン通信ネットワーク

広げましょう
 ヒューマン
 ネットワーク

Vol. 13

Human Communication & Network
ECCC
 Ehime
 Computer
 Communication
 Club

えひめコンピュータコミュニケーションクラブ



知ってみれば、簡単なパソコン通信!!

— ECCCパソコン通信初心者講座開催中—

ECCCでは、パソコン通信による市民のネットワークづくりを推進するため、毎週火曜日(19:00~21:00)に(財)愛媛県まちづくり総合センター内ECCC事務局において、パソコン通信初心者講座を開催しています。(受講料：無料)

講座は実習を中心にマンツーマン方式で指導にあたりますので、パソコンやデータ通信に関する予備知識のない方でも安心して受けられます。また、1回で覚えられなくても何回でも受講できますから、自分のペースで学習することが出来ます。

さあ、思い立ったが吉日、ちょっと勇気を出して、火曜日の夜、ECCC事務局に顔を出してください。広い駐車場もありますから車で気軽にこれます。

第5回国民文化祭・愛媛90

会 期：平成2年10月19日(金)～28日(日)

テ ー マ：架けよう一文化の橋・交流の橋

「第5回国民文化祭・愛媛90」は、愛媛らしさをアピールする数々のイベントにより、愛媛文化の全国への発信を通じて、愛媛のイメージアップを図るため盛大に開催されるものです。皆さん、こぞって参加しましょう。

なお、開催日程・会場等は、下記のとおりです。

「国民文化祭」は、各種の文化活動を全国的な規模で発表する場として、競演・交流を通じて文化活動への参加意欲を高め、新しい文化の創造と特色ある地域文化の発展を目指すアマチュア文化の祭典です。

月 日	事業名・会場	事業名・会場	事業名・会場	事業名・会場	事業名・会場
10月19日 金	オープニングパレード (松山市街ほか)	開会式・オープニングフェスティバル (県民文化会館メインホール)			
10月20日 土	邦楽音楽祭 (県民文化会館サブホール)	文芸大会(連句) (子規記念博物館)	世界の名曲を歌おう (今治市公会堂)	全国ビッグアート展(実演) (松山市営球場)	全国へバーパークラフト展「展覧会」江市民体育館・紙のまち資料館 全国イラスト展「展覧会」県民文化会館異色の国 全国ビッグアート展「展覧会」今治市展示場 生活文化総合フェスティバル「松山市総合コミュニティセンター」 美 術 展 立 美 術 館 ・ 県 民 館 かすり&タオルファッション「展示」今治地域振興センター
10月21日 日	全国吟詠剣詩舞道祭 (県民文化会館メインホール)	文芸大会(川柳) (県民文化会館サブホール)	文芸大会(俳句) (子規記念博物館)	海のフェスティバル (柏方町民会館(開発総合センター)) (宮浦港、能勢町海城ほか)	
	合唱と吹奏楽の祭典 (松山市民会館大ホール)	文芸大会(短歌) (松山市民会館中ホール)	日本フルーツフェスティバル (八幡浜市民スポーツセンター)	世界風合戦 (五十崎町小田川河川敷地) (五十崎町コミュニティセンター) 風 博 物 館	
	民話演劇祭 (南予文化会館大ホール)	大茶会 (商業園)			
10月22日 月	文芸大会(合同大会) (県民文化会館メインホール)	文芸大会(吟行) (松山市内)	21世紀の生活文化シンポジウム (西条市総合体育館)		
10月23日 火	国際HAIKU大会 (県民文化会館サブホール)	アマチュアミュージックフェスティバル (大洲市民会館)			
10月24日 水	バレエ&モダンダンス祭 (県民文化会館メインホール)	湯けむりシンポジウム (松山市民会館大ホールほか)			
10月25日 木	全国能楽フェスティバル (県民文化会館サブホール) [県民文化会館県民広場]	アマチュアミュージックフェスティバル (上浮穴産業文化会館)	みんなで踊ろう日本舞踊 (今治市公会堂)		
10月26日 金	全国民謡大会 (県民文化会館メインホール)				
10月27日 土	映像祭 (県民文化会館サブホール)	全国オーケストラの祭典 (松山市民会館大ホール)	かすり&タオルファッション (今治市公会堂)	街並み文化シンポジウム (内子町農村労働福祉センター) 館	
	アマチュアミュージックフェスティバル (黒島海浜緑地公園野外音楽堂)	民俗芸能祭 (南予文化会館大ホール)	おさかなグルメフォーラム (城辺町社会福祉会館)		
10月28日 日	閉会式・グランドフィナーレ (県民文化会館メインホール)				

〔お問い合わせ先〕

〒790 松山市一番町4丁目4番地2 愛媛県庁内

第5回国民文化祭・愛媛県実行委員会事務局

TEL0899-41-2111 (内線2176-2178)

FAX0899-47-2235



十月一日からセンターの一員となりました宇都宮真理子です。

実家は、ミルクとシルクの町の野村町です。本当の自然の中の自然で育ちました。

自然があるから人間私達があるのだと思います。

自然は自然らしく、そして人間は人間らしく与えられた大切な生命を、その時その時精一杯に生きるべきだと思います。

今を大切に生きる為にも、センターの一員になれた以上、どんな私ですけれど、この仕事に精一杯頑張ります。応援して下さい。これからよろしくお願ひ致します。

.....ニューフェイスだにゃ!!.....



舞たうんをこよなく愛するみなさん、はじめまして毛利智恵子です。

センターでは一番「若者」なので、一番すみっこで仕事をしています。(写真では、いくつに見えるでしょうか)

今は、まだなんにもわからない私ですが、あと半年もすれば、きっと一人前になっていると思います。でも、もしその時も半人前の私でも、みなさん見捨てないで下さいね。

とにかく、これから二年間、一生懸命がんばります。どうぞよろしくお願ひします。

まちづくり活動の情報誌としてこの「舞たうん」を隔月で発行しております。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など気楽にどうぞお寄せ下さい。

個人宛の恋文やファンレター等々なんでも結構です。お待ちしてます。

次回「舞・たうん」は、記念すべき第二〇号ですので、少々力が入ったものを乞うご期待!!

「舞・たうん」編集係

二人の新しいM.S. (宇都宮・毛利) まで。

〒七九〇 松山市道後二万一の二
 (愛媛県まちづくり
 総合センター)

TEL

〇八九九(二五)五五五七

FAX

〇八九九(二五)六六八〇